

或本の歌一首 并せて短歌

一三八番

石見の海 津の浦をなみ 浦なしと 人こそ見らめ 潟
 なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よ
 しゑやし 潟はなくとも いさなとり 海辺をさして
 にくたつの 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻
 明け来れば 波こそ来寄れ 夕されば 風こそ来寄れ
 波のむた か寄りかく寄る 玉藻なす なびき我が寝し
 きたへの 妹が手本を 露霜の 置きてし来れば こ
 の道の 八十隈ごとに 万たび かへりみすれど いや
 遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ はしきや
 し 我が妻の児が 夏草の 思ひしなえて 嘆くらむ
 角の里見む なびけこの山

反歌一首

一三九番

石見の海 打歌の山の 木の間より 我が振る袖を 妹
 見つらむか

柿本朝臣人麻呂の妻依羅娘子、人麻呂と相

別るる歌一首

一四〇番

な思ひと 君は言へども 逢はむ時 いつと知りてか
 我が恋ひざらむ